

# 韓国の中高等教育段階における 日本語母語話者参加の実際とその意義

澤邊裕子・金姫謙

〔キーワード〕韓国、中高等教育段階、韓国人日本語教師、日本語母語話者（ネイティブ）  
第7次教育課程

## 〔要旨〕

本稿では、韓国の中高等教育段階における日本語母語話者（以下、「ネイティブ」）の参加の実態を踏まえて、その意義と今後の可能性について述べた。現在、ネイティブは教師やゲスト、インターネットを通じた交流の相手として授業に参加している。2003年には国際交流基金ソウル日本文化センターの青年日本語教師が1年間高校で韓国人教師とチーム・ティーチングを実践した。その結果、ネイティブの参加には以下のような可能性があることが示唆された。

- （1）生徒の日本語での意思疎通能力を育成する。
- （2）ネイティブと生徒、韓国人教師との間でお互いの文化を理解しようとする態度を育てる。

韓国の第7次教育課程の理念には「相互理解と国際交流に貢献する人材を養成すること」がある。ネイティブが参加することは、この教育理念の実現の一助になるのではないと思われる。より多くの韓国人教師にネイティブ参加の目的と意味が認識され、相互理解を促す場が作り出されていくことが期待される。

## 1. はじめに

国際交流基金の『2003年日本語教育機関調査』によれば、韓国における初中高等教育段階での日本語学習者数は78万人にも及び、そのほとんどが高校で第2外国語として日本語を学ぶ学習者である。

韓国では2001年から中学校で、2002年から高校で第7次教育課程（日本の「学習指導要領」に相当）が施行されている。中学校では裁量科目<sup>(1)</sup>の1つとして日本語を学べるようになっていくが、その目的は「意思疎通ができる基礎的な能力の育成」と「外国人の生活様式と考え方が理解できる態度の養成」であり（韓国教育部 1997b）、日本や日本人への理解を深めながら日本語に触れ、親しむことが目指されている。また第2外国語として日本語を学ぶ一般系高校（以下、一般高校）における教育課程の学習目標には言語の4技能の伸張とインターネット検索能力、日本の生活文化への関心などが組み込まれており、意思疎通能力、文化理解能力の育成が重要視されている（韓国教育部 1997a）。李徳奉（2004）は、第7次教育課程の特徴を中学校・高校の種類別に具体的に解説しているが、第7次教育課程全般に渡る理念を「相互理解や国際交流に貢献

する人材を養うこと(李徳奉 2004:26)だと述べている。このような理念のもと教科書も新しくなり、中学校および高校の日本語教育の現場では、これらの教育目標の実現のための具体的な授業方法について考えることが求められている。

こうした中、新たな授業方法として日本語母語話者(以下、ネイティブ)を授業に参加させる動きも見られる。教育人的資源部<sup>2)</sup>が政策としてネイティブを大量に採用し、学校に配属させる計画は現在のところ、実施の段階には至っていない<sup>3)</sup>。しかし各地域の教育庁<sup>4)</sup>や学校レベルでは少数ながら専任のネイティブ教師を採用するケースもあれば、教師が個人的にネイティブを呼んで授業をすることも行われている。このようなことからネイティブ参加のニーズが潜在的にあることが窺われる。さらにソウルや釜山などの大都市には日本人居住者や日本人留学生が多く、韓国人日本語教師(以下、韓国人教師)側で求めれば、授業にネイティブを迎えることがそれほど難しくはない状況にあるともいえる。したがってネイティブを授業にどう参加させていくか、その方法や利点を知っていれば、ネイティブとの効果的な授業を行いたいという教師はさらに増えるのではないかと考えられる。こうした潜在的なニーズを踏まえ、2003年、国際交流基金ソウル日本文化センター(以下、ソウルセンター)では、韓国人教師とネイティブ教師とのチーム・ティーチング<sup>5)</sup>(以下、TT)のプロトタイプを開発するプロジェクトを立ち上げた。

本稿の目的は、韓国の中高等教育段階におけるネイティブ参加の実態を踏まえてその意義と今後の可能性を探ることにある。そのために、まず韓国の中高等教育段階における正規日本語授業<sup>6)</sup>へのネイティブ参加の概況を報告する。次に、ソウルセンターの青年日本語教師(以下、青年教師)が韓国人教師とともに高校でのTTのプロトタイプを開発すべく、1年間に渡って実践したTTの内容とその効果について報告する。

## 2. ネイティブ参加の概況

日本語授業へのネイティブ参加の形態には、次の3つがある。

- ・「教師」としての参加
- ・「ゲスト」としての参加
- ・「インターネットを通じた交流の相手」としての参加

### 2.1 「教師」としての参加

#### 2.1.1 ネイティブ教師の採用の形態と目的

ネイティブを日本語教師として正規に採用しているのは、外国語教育を専門に行う外国語高校<sup>7)</sup>と一部の一般高校である。現在、中高等教育段階においては、英語教育に比べネイティブ教師の正式な採用が活発に行われているとは言えない(相澤 2004:114)が、各地域にある教育庁レベルでは徐々にネイティブ教師<sup>8)</sup>を専任として採用するところが出てきている。

現在行われているネイティブ教師採用の形態と目的は、大きく次の3つに分けられる。

(1) 韓国の各地域の教育庁が採用する。〔韓国側のニーズ／外国語教育として〕

全羅南道の教育庁では2001年より3名、2002年からは4名のネイティブ教師を採用し<sup>(9)</sup>、羅州、麗水、木浦、順天の4地域の一般高校に1名ずつ配属している。さらに、済州道、京畿道でも2004年から1名ずつ採用し、外国語学習センター<sup>(10)</sup>や外国語高校、ネイティブ教師を受け入れたいと希望した高校に配属させている。

(2) 韓国の高校が独自に採用する。〔韓国側のニーズ／外国語教育として〕

韓国には外国語教育を専門に行う外国語高校が存在するが、日本語科のある外国語高校のほとんどは独自にネイティブ教師を採用している。1校あたり1～2名のネイティブ教師が所属している。

(3) 日本の行政機関が採用する。〔日本側のニーズ／公務員交流や研修として〕

日本に姉妹都市を持つ地域では、姉妹都市の教育委員会との交換研修プログラムや文部科学省 REX プログラム<sup>(11)</sup>によってネイティブ教師を受け入れているケースもある。江原道の春川市では姉妹県である鳥取県から毎年1名のネイティブ教師が来ており、一般高校<sup>(12)</sup>がその受け入れ先となっている。慶尚北道では鳥根県と姉妹提携があり、慶北外国語高校で文部科学省 REX プログラムでの派遣教師の受け入れを行っている。

## 2.1.2 ネイティブ教師の活動内容

教育庁所属のネイティブ教師の活動内容は、大きく分けると「生徒に対する日本語会話指導および日本文化紹介」「韓国人教師の日本語能力向上のための支援」の2つになる。配属校での授業担当の他、配属校以外の学校への訪問授業<sup>(13)</sup>、教師対象のワークショップを開くなどの活動も行っている。4人のネイティブ教師はすべて「補助教師<sup>(14)</sup>」としての採用だが、実際には1人で授業を担当することもある。その場合、授業では韓国人教師と教科書の学習内容を分担し、ネイティブ教師として主に会話や聞き取りの部分を担当している。また、韓国人教師と一緒にクラスに入って教えているネイティブ教師もいる。

外国語高校の場合は、主として生徒の日本語運用能力を高めることを目的としてネイティブ教師を採用しており、ネイティブ教師は主に「日本語会話」や「聴解」の授業を担当し、試験作成、評価も行っている。外国語高校でのネイティブ教師の実態については、相澤(2004)が詳しい。

文部科学省 REX プログラムで外国語高校に派遣されているネイティブ教師の活動も多岐に渡る。

外国語高校の正規教員と同様の立場で「日本語会話」の時間を担当し、試験作成、評価を行っているケースもあるようである。さらに島根県から慶北外国語高校に派遣されているネイティブ教師は韓国人教師対象の職務研修<sup>(15)</sup>や慶北日本語教育研究会の講師、教員採用試験の面接官、島根県内の高校との交流会の世話役を務めるなど、慶尚北道という地域に密着した仕事、島根県との橋渡しとなる仕事を任されている。

## 2.2 「ゲスト」としての参加

教育庁や学校の正式な採用ではなく、韓国人教師が個人的にネイティブを授業に招いて一緒に教室活動を行う場合もある。以下は比較的ネイティブが多いソウル近郊の中学校の日本語教師34名、高校の日本語教師45名、合計79名を対象に「ネイティブゲストを招いて授業を行ったことがあるか」「ネイティブゲストを招いて何をしたか」について聞いたアンケートの結果<sup>(16)</sup>である。

中学校教師の34人中6人(17.6%)、高校教師の45人中11人(24.4%)が「ネイティブゲストを招いて授業を行ったことがある」と答えている(表1)。中学校での日本語教育は始まったばかりであり、新しく採用された教師は中学校に配属されるケースが多い<sup>(17)</sup>。今回調査対象となった中学校教師もそのほとんどが教師経験通算1年未満~2年以内の若手教師であった。中学校で日本語をどう教えるかという自らの教授法の確立のため試行錯誤をしている状態であるのだろう。「現在、ネイティブとの授業を計画中」という教師もいた。日本への留学経験や滞在経験の多い比較的若い世代の教師は日本語能力も高く、ネイティブの友人や知り合いを持っていることが多い。今後機会を作ってネイティブとの授業をしたいと考える教師は少なくないのではないかと推測する。

「招いたことがある」ネイティブの内訳としては、「留学生」「日本から遊びに来た友人」「日本人の知り合い」「日本語の先生」「大学の教授」などがあり、生徒にとっては友達というよりもお姉さん、お兄さん、に近い存在のようであった。

「ネイティブゲストを招いて何をしたか」という質問に対しては、中学校では「教科書を読んでもらった」「レリア(実物教材)を持ってきてもらい、文化紹介をしてもらった」、高校では「生徒が習った日本語を使って生徒と会話をしてもらった」といった意見が多く、ネイティブゲ

表1 「ネイティブゲストを招いて授業を行ったことがあるか」アンケート結果

	ある	ない
中学校教師(34人)	6人(17.6%)	28人(82.4%)
高校教師(45人)	11人(24.4%)	34人(75.6%)
合計(79人)	17人(21.5%)	62人(78.5%)

ストは「生徒の会話の相手」「日本文化の紹介者」としての役割を期待されていることがわかった。

### 2.3 「インターネットを通じた交流の相手」としての参加

ネイティブ教師を採用していない学校で、周りにネイティブが少ない、あるいは日本にいる中高生を授業に参加させたいというときには、インターネットを活用するという方法がある。

韓国日本語教育研究会<sup>(18)</sup>では毎年夏に「全国授業研究発表大会」を開催している。第7次教育課程に掲げられている教育目標を達成するための授業の方法について考え発表する機会となっているが、2004年の大会ではインターネットを通してネイティブを授業に参加させた発表も見られた。以下に、2004年に実施された授業研究発表大会で発表されたものの中からネイティブを参加させた授業の例を挙げる。2004年には14の授業発表があり、そのうち5つがネイティブが参加した例であった。

- ・日本の中学生の自己紹介ビデオを見る。(中学校)
- ・日本の高校生とEメール交換をする。(高校)
- ・メッセージャーを利用してネイティブと音声チャットする。(高校)
- ・Eメールで日本の高校生にアンケート調査をする。(高校)
- ・日本の姉妹校の先生から特別授業を受ける。(高校)

これら5つの発表は、日本語をコミュニケーションの道具としてネイティブと交流すること、日本文化の理解を目的とした授業についてが主であった。ネイティブが周りに少ない地方の学校でも「インターネット」という媒体を使用し、生徒と年齢の近いネイティブが参加することで自然に「日本語で意思疎通」したり、「日本文化を理解」したりする状況を作ることができる。第7次教育課程で強調されている意思疎通能力や文化理解能力、インターネットを活用する能力の育成を意識し、ネイティブの参加が試みられているようにも観察される。

しかし、こうしたネイティブの参加によって、生徒が日本語での意思疎通能力を高めたり、文化理解能力を身につけたりすることがどこまで可能なのかについてはまだ十分に明らかでない<sup>(19)</sup>。

## 3. 高校におけるティーム・ティーチングの実践報告

ここでは2003年度にソウルセンターの青年教師が高校の韓国人教師と実践したTTの内容について述べる。青年教師はソウル市内の3つの一般高校で7名の韓国人教師とTTを行ったが、本稿ではその中の1校、1名の韓国人教師とのTTの実践について報告する。

### 3.1 目的

韓国人教師とネイティブ教師とのTTのモデルを開発し、効果的な授業の方法を考えること、さらに、単発の参加では見えにくい教育効果を探ることが目的である。

### 3.2 方法

2003年3月から12月まで、『日本語』(出版社:ブラックボックス)を学ぶ人文系の一般男子高校2年生のクラス<sup>(21)</sup>に週に1度ネイティブ教師が訪問し、韓国人教師とともに授業を行った。事前の打ち合わせは前日までにEメールや電話を通して行い、お互いの役割について確認した。授業の後には2人で授業を省みて次の授業への参考にした。

### 3.3 生徒と韓国人教師の特性

#### 3.3.1 生徒の特性

2年生のクラスは文系クラスと理系クラスに分かれ、どちらも3月から日本語を学び始めた。主に日本のアニメやゲームを通して日本語に関心を持つ生徒が存在する反面、日韓の歴史的経緯から日本に対して抵抗感を抱く生徒も少なくはなかった。人文系の学校はほとんどの生徒が大学に進学するため、2年生の生徒もすでに受験勉強に追われている。日本語は大学入学試験に関わらないという生徒が多いため、学習意欲を持たせ、維持させることが教師側の課題となっていた。

#### 3.3.2 韓国人教師の日本語教授歴

2003年3月に1年間契約の講師として着任した。それまで日本語教師経験はなく、以前は民間会社で日本に関わる仕事に従事していた。日本への留学など長期滞在の経験はないが、日本語での交渉能力は十分あり、ネイティブ教師との授業前後の打ち合わせが日本語で問題なく行われた。この韓国人教師からは、日本語教師としての経験不足と日本の生活文化などに対する知識不足を、ネイティブ教師とのTTによって補おうという姿勢が見られた。

#### 3.3.3 韓国人教師の日本語教育観

高校での日本語教育を通して、生徒に身に付けさせたいと思った能力について韓国人教師は「高校を卒業した後、自己紹介やあいさつ程度を日本語でできる能力、そして、生徒が日本人に対してむやみに反感をもつのではなく、主体的に、客観的に自分で判断できる能力を身につけさせたいと思った」と話している。こうした能力を育てようという目標は、ネイティブ教師の持つ目標とも重なり、ネイティブ教師とのTTを計画・実施する上で最も重要な視点となった。

### 3.3.4 韓国人教師の通常の授業の進め方

韓国人教師は、日本語教師 1 年目にして通常の単独での授業と、週 1 回の TT を並行することになった。3.4 に述べるように、TT では主に場面を意識した運用練習を行い、韓国人教師の単独授業では主に読解など、韓国語を使用しながら教科書本文の内容を把握するといった活動が行われた。しかし、単独で授業を進める場合でも常にネイティブが参加した授業を念頭に置き、積極的に日本語を使用したり、授業にコミュニケーションなゲームを取り入れたりしながら、生徒と教師の間で自然と日本語でのコミュニケーションの場が生まれるように配慮していた。

### 3.4 授業で行った教室活動

表 2 にネイティブ教師を交えて行った主な教室活動をまとめる。授業では実際のコミュニケーションに近い、以下のような日本語の運用練習を中心に行った。

- ・誕生日パーティーなどの場面、状況を与えたロールプレイ
- ・生徒と日本語ネイティブがお互いに持っている情報について話したり聞いたりするインフォメーション・ギャップ活動
- ・自分自身について話したり、友達について聞いたりするインタビュー活動

また、授業を行う際には、韓国人教師とネイティブ教師がお互いに明確な役割を持って行うことに配慮した<sup>(22)</sup>。具体的には以下の点に注意した。

- ・韓国人教師とネイティブ教師、韓国人教師 / ネイティブ教師と生徒、生徒同士がインフォメーション・ギャップのある会話を行うこと。
- ・活動の前に韓国人教師とネイティブ教師によるデモンストレーションを行うこと。
- ・韓国人教師とネイティブ教師による会話を聞き取る練習を多く取り入れること。
- ・ネイティブ教師が正確な発音のモデルとなること。
- ・学習項目の説明のとき、韓国人教師は特に生徒が間違いやすい点に注意して指導を行うこと。
- ・ドリル練習のとき、韓国人教師は韓国語でのキューを、ネイティブ教師は日本語でのキューをすばやく出すこと。
- ・ネイティブ教師がいつもテープレコーダー代わりにならないようにする。ネイティブ教師が韓国人教師や生徒にとってのコミュニケーションの相手になるようにすること。
- ・生徒が関心をもちそうな話題を取り入れること。その話題に関する日本の事情について生徒が理解を深める状況を作ること。そして生徒が日本語や日本の事情について質問しやすい雰囲気を作ること。

表2 ティーム・ティーチングで行った教室活動

月	教室活動
3月	1 課 ロールプレイ：自己紹介をする
4月	1 課 ロールプレイ：家族紹介をする 2 課 ロールプレイ：お祝いする
5月	2 課 ロールプレイ：誕生日パーティー 3 課 インフォメーション・ギャップ：店の場所を尋ねる
6月	3 課 インフォメーション・ギャップ：高校の教室を案内する 3 課 インタビュー：クラスメート、ネイティブの好きなものについて聞く
7月	4 課 インフォメーション・ギャップ：時間について聞く
9月	5 課 ロールプレイ：電話で約束する
10月	5 課 インフォメーション・ギャップ：有名な歌手の誕生日について聞く
11月	6 課 ロールプレイ：ネイティブにソウルの街を紹介する。
12月	7 課 ロールプレイ：病院へ行く インタビュータスク：テーマ別のグループに分かれてネイティブにインタビューする

### 3.5 ティーム・ティーチングの効果

#### 3.5.1 「意思疎通能力の育成」という観点から見た効果

##### (1) 澤邊・金(2004)から

澤邊・金(2004)は、TTを1年間に渡って受けた生徒を対象にネイティブ教師とのインタビュータスクを実施し、生徒が獲得したコミュニケーション能力について分析、考察している。インタビュータスクの中では、生徒たちがネイティブ教師から情報を得るために、コミュニケーション・ストラテジーを使用したり、生徒同士で自発的に助け合ったりしながら、自分たちの意図を何とか伝えようとしたり、ネイティブ教師が表現したことを何とか理解しようとしたりしている様子が観察された。このことから、生徒の意思疎通能力が育成されたのではないかと分析し、授業にただネイティブ教師がいて日本語を話していればよいということではなく、韓国人教師およびネイティブ教師がそれぞれ授業の中で果たすべき役割を持って、どんなことをしてきたかということが重要であると指摘している。考察の中で「日々の授業実践の中で教師側が日本語で積極的に生徒とコミュニケーションをとることで生徒へのインプットを促し、さらにインプットされた日本語を運用する場を提供することで生徒のアウトプットを促している」(澤邊・金 2004: 110)としているが、ネイティブ教師の参加はこの日本語インプットとアウトプットの場を作るという意味で特に重要な意味を持つのではないかと考える。



## (2) 韓国人教師のコメントから

TTを行う上で気をつけていた点について、韓国人教師は次のようなことを述べている。

「できるだけネイティブ教師と生徒との会話を多くするように心がけた。一度、日本人と直接話したことがある人は外国人に対して恐れずに話することができるし、外国語に対する興味も増えるから」そして「授業で既習の日本語をたくさん使うようにした。生徒とのコミュニケーションにおいてもなるべく日本語を使うようにしていた。生徒から教師に質問するときにもなるべく日本語を使うように促した」と話している。意識的にネイティブと生徒との会話の場を作ること、韓国人教師と生徒との間でも日本語の使用を意識していたことがわかる。教室での日本語使用については、「日本人の先生といつも日本語で話していたので、授業でも自然に日本語が出るようになった」と述べ、ネイティブ教師の参加が韓国人教師にとってもいい影響を与えていたことが窺われる。

## (3) 生徒のコメントから

TTを1年間受けた生徒に自由に感想を述べてもらった中には次のようなコメントがあった。

「初めの頃は聞き取りに難しさを感じたが、だんだん時間が経つにつれて、聞き取れる部分も多くなって楽しくなってきた」「ネイティブの先生との授業のときに、普段習っている日本語を使うことができ、先生が言っていることもわかるようになってきて、いつもの授業の効果を感じることができた」といった積み重ねの効果を感じたというコメント、また「日本人と話をすることは難しかったが、今は自信がもてるようになった」といった外国人と話す際に感じる恐怖感をだいぶ感じなくなったというコメント、「最後のインタビュータスクの授業では、言いたいことを十分に言い表すことができなくてもどかしかった。次にこのような機会があれば、もっとたくさん話せるようになりたい」などのコメントがあった。生徒たちはネイティブと実際に対話をしてみるという体験から、言いたいことが言えないというもどかしさを感じたり、習った日本語の中でも意思疎通ができたということに喜びを感じたりしていることがわかる。ネイティブ教師との対話で自信を失った、などといった否定的な感想を述べた生徒はなく、意思疎通に難しさを感じた生徒でも「今度はわかるようにがんばりたい」といった前向きな姿勢を見せていた。「自分でもやればできる。できるようになりたい」「日本語を使って意思疎通することは楽しい」という気持ちを持つ生徒が生まれたというのは、生徒が日本語での意思疎通能力を養う上で、動機づけとなる大きな効果の一つではないかと考える。

### 3.5.2 「文化理解能力の育成」という観点から見た効果

#### (1) 韓国人教師のコメントから

TTを行う上で意識していた点について韓国人教師はさらに文化理解の点にも触れている。

「日本語だけでなく、日本事情、文化の理解を重視した。日本文化に関しては生徒からの質問も多いが、自分が答えられない部分について生徒からネイティブ教師に直接聞かせるようにした。自分がよく知らない日本での生活や文化面に関してネイティブ教師に答えてもらえることがとてもよかった」

生徒の関心事は日本人の衣食住、年中行事から芸能人やゲーム、マンガなどの大衆文化に至るまで幅広い。韓国教師1人の授業では写真を見せながらの解説が多くなってしまいが、ネイティブ教師を交えての授業では、それを易しい日本語を使ったクイズ形式にしたり、韓国教師とネイティブ教師との会話の聞き取りゲームの内容にしたり、あるときは、生徒から直接質問を受けてネイティブ教師が答えるなど、パラエティーを持たせて指導することが可能になった。さらに、ネイティブ教師との授業を通して日本や日本人に対する関心が高まり、「自分が好きな日本人」についてレポートを書くという課題を与えた結果、歴史上の人物やサッカー選手など多様な人々について調べてレポートを書いてきたと韓国教師は話している。この課題を通じてさらに日本人に対する認識が深まり、日本に対する理解が深まったと感想を書く生徒もいたという。

## (2) 生徒のコメントから

ネイティブ教師との授業を受けた生徒から出てきた意見の中には「日本の文化について知りたかったことについてネイティブの先生に教えてもらえてよかった」といった、日本についての知識、情報を得て理解が深まったことに関するコメントや、「理系クラスなので3年生になったら日本語の授業はなくなるが、大学に入ったらぜひまた日本語を勉強したい」という日本語への関心を積極的に示すコメント、「ネイティブの先生がいらっしゃるようになってから、日本人に対する否定的な気持ちがなくなった」「以前は日本に対して抵抗感を感じていたが、ネイティブの先生と話すようになって、その気持ちが少なくなった」のように、以前持っていた日本や日本人に対する悪いイメージが緩和された、といったコメントが少なからずあった。このような事例から、生徒が必ずしも日本や日本人に対する肯定的なイメージを抱いて日本語を選択しているわけではないことが推察されるとともに、実際に日本人ネイティブと触れ合う体験を持つことによって、生徒が知識として日本文化の理解を深めるに留まらず、自らの先入観を修正し、対日・対日本人イメージを好転させる機会を得たことが観察される。

### 3.5.3 教師に与えた効果

#### (1) 韓国教師のコメントから

1年間に渡るTTを通してさまざまなことを学んだと韓国教師は話している。1人ではなく2人で教えるという経験から「自分1人ではわからなかった教授法を学んだ。他の人の意見を取り入れることによって自分の教え方の幅が広がった」と述べている。百瀬(1996)は海外における

若手ノンネイティブ教師養成のための TT のあり方についてその方法、成功させるための条件などを挙げているが、TT の成功のためには「円滑な人間関係が不可欠である」(百瀬 1996: 47)と述べ、「互いに学びあう」横の人間関係の構築が必要だとしている。韓国人教師も、ネイティブ教師とのコミュニケーションの大切さ、意見を尊重し、互いに学び合うことが TT には必要で、そこから自分自身が得たことが多かったと話している。

またさらに「TT は 1 人でする授業よりも時間、努力、労力が必要だが、その分の効果があり、さらにいい授業にするためにはどうすればいいのか考え、努力するようになった」と振り返っている。TT という方法によって自分自身が成長していったと肯定的な捉え方をしているようである。このコメントからもわかるように、TT 実施の難しさは、2 人で考える、研究する作業のために時間と労力がかかること、教え方について異なる考え方があっても、話し合い、最善の方法を探っていかなければならないことである。しかしそれを乗り越えることができれば、教師 1 人で授業を行う以上の充実感や効果をより深く感じるができるのだろう。

## (2) ネイティブ教師のコメントから

韓国人教師との TT によりネイティブ教師が学んだものも多い。ネイティブ教師はまず授業の方法について「常に、韓国人教師だからこそできることとネイティブ教師だからこそできることは何かについて考え、それぞれの限界が補えるような授業について考えることが身についた。効果的な授業を行うためには、それぞれの役割をしっかりと決めて行うことが大切だと感じた」と振り返る。ネイティブは自然な日本語の発音のモデルになったり、日本事情・文化についての提供や紹介をしたりする上では韓国人教師に勝るものを持っている。しかし、生徒の心理的な側面の理解であったり、学習上の困難点を把握して克服のための方法を紹介したり、韓国語でのきめ細かな指導をする上ではネイティブ教師には限界があり、韓国人教師と協同してそれぞれの特性を生かしていかなければ効果的な指導はできないと感じている。韓国人教師は学習者と母語や文化背景が同じで学習者としての経験もあり、毎日生徒たちに接して状況を一番よく把握しているという意味でその存在は大きい。

さらに、韓国人教師や生徒との触れ合いの中で、自分と異なった考え方を認め、受け入れていくという態度が形成されるようになったとも感じている。

「日本ではこうするのに...、こうなるのに...、などについて日本でのやりかたを韓国の教育現場でも求めてしまうことがあったが、韓国人教師がどのように生徒と接しているか、どう教えているかをよく見てそこから学ぼうという姿勢を身につけること、そこから自分はどうすべきか考えることが大切だと感じた。また、授業や授業外で生徒と話す中で、生徒がどのように日本や日本人、そして韓国を見ているか、ということを知ることができた。韓国・韓国人に対してより多角的に捉えることができるようになったと思う」

異なる文化を理解しようとする姿勢は、生徒だけでなく、教師側にも必要なことである。ネイティブ教師にとっても生徒や教師との触れ合いが相互理解のための機会になるということを示している。

### 3.6 ティーム・ティーチングを可能にする条件

1年間のTT実践を踏まえて、前述したような効果を上げるためには、韓国人教師とネイティブ教師に何が必要なのかを以下にまとめたい。

まず、なぜTTを行うのかという目的が明確でなければならない。生徒にどんな能力を身につけさせたいのかを具体的に考えて、その目標をもとに年間計画と授業の教案を作る必要がある。これらの作業は韓国人教師あるいはネイティブ教師の一方に任せきりにせず、協同で行うことが大切である。たとえば活動の指示や発問の仕方、使用する語彙や文法についての事前打ち合わせは最低限必要である。打ち合わせを円滑に行うためには、韓国人教師に日本語での交渉能力があり、ネイティブ教師にも初級程度の韓国語能力があることが望ましいだろう。これは授業以外の時間にコミュニケーションを取りやすくするためにも大切なことである。

さらに、韓国人教師による単独の授業のときにも、日本語を生徒とのコミュニケーションの手段として使うように意識することが大切である。たとえば、通常の授業では生徒と日本語で話さないのに、TTのときだけ日本語を使ってコミュニケーションしようとしても、生徒は耳が慣れていないため、授業がスムーズに展開されない可能性がある。普段の韓国人教師の授業で基礎力を身につけ、ネイティブ教師との授業で日本語での意思疎通能力が発揮できれば、生徒にとって大きな自信となる。それが大きな動機づけとなって、生徒の学習意欲にも結びつくようになると思われる。

## 4. 韓国の中高等教育段階におけるネイティブ参加の意義

2.で韓国の中高等教育段階におけるネイティブ参加の状況を概観し、3.で実際に行われた韓国人教師とネイティブ教師とのTTの事例を報告した。この2つから韓国の中高等教育という教育現場において、ネイティブの参加がどんな意義を持つか、どんな可能性を持っているかが見えてくるのではないだろうか。

まず、生徒にとってはネイティブと実際に対話してみるという体験から、日本語のみならず外国の人と外国語で話す際に感じる緊張感や恐怖感を取り除く訓練になり、さらに、通じた喜びから自信を得ることが可能になる。また、ネイティブが教室にいることにより、日本語で話すことが自然な環境になり、生徒と教師、生徒同士のコミュニケーションにおいても日本語使用が促される。これを積み重ねることにより、日本語での意思疎通能力は少しずつ培われていくものと考えられる。

さらに重要だと思われることは、一般書籍や教科書、テレビや新聞を通してのみ形成されている生徒の日本観・日本人観がネイティブと実際に触れ合うことを通して再形成される機会を持つということだろう。日本が韓国かを問わず、中高等教育段階の子どもたちは諸外国に対するイメージを形成していく際に、家庭や公教育現場、マスメディア等、身近な大人の言動や社会の雰囲気には大きな影響を受ける傾向がある。「日本はとにかく嫌い」も、「韓国のものは何でも好き」も、どちらも対象と適当な距離を置くバランスのとれた価値観とは言いがたい。教室におけるネイティブの存在は「日本人にもいろいろな人がいる」事実として生徒に受け入れられ、それは生徒が1つの価値観に縛られずに、よりグローバルな視野を持ち、世界観を形成することにもつながる。このことは中高等教育段階の生徒にとって特に重要である。

さらに、生徒だけでなくネイティブにとって生徒、韓国人教師との授業が韓国文化を理解する場となるということも重要な視点である。ネイティブが参加した授業では、生徒、韓国人教師、ネイティブの三者がそれぞれ自分たちの文化を意識しながら異なる文化背景を持つ人々と接し、それらを理解しようとする姿勢を養う、バランスのとれた相互理解の場になるのではないだろうか。ネイティブをゲストとして招く場合でも、インターネットを通して交流する場合でも、この相互理解を促す可能性は十分にあるだろう。そしてこれらが実現されれば第7次教育課程の目標の達成にもつながると考えられる。今後、韓国人教師がこうした相互理解を促す場を意識的に作っていくことが望まれる。

## 5. おわりに

中高等教育においてネイティブの参加が本格的に行われていない韓国においては、まだネイティブが参加した授業の結果の検証や研究が十分に行われておらず、今後の研究によるところが大きい。ネイティブの参加は第7次教育課程の目的を実現するための方法の1つであると考えられる。しかし、教室にネイティブがただいるだけで大きな効果が得られるというものではないだろう。韓国人教師がどんな目的でどうネイティブを参加させればよいかについては、実践を通してさらに研究が進められていかなければならない。本稿では、ネイティブを授業に参加させ、生徒、韓国人教師、ネイティブの三者がそれぞれその効果を感じることができた一例を報告した。韓国人教師とネイティブ教師との授業の事例はソウルセンターにおいて事例集としてまとめられる予定である。今後より多くの韓国人教師によって実践と研究が進められることを期待したい。

謝辞：本稿執筆にあたり、有益な情報を提供して下さった全羅南道教育庁の今千春氏はじめ日本人教師の皆様、慶北外国語高校の野津真一氏、草稿に目を通し貴重な助言をくださった独立行政法人国際交流基金ソウル日本文化センター主幹の広田由治氏、三原龍志主任講師、天野千春副主任講師に心より感謝申し上げます。

〔注〕

- <sup>(1)</sup>日本語の他、中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、アラビア語、ロシア語が「生活外国語」という科目として設けられている。外国語は中学校の校長の判断によって決定される。裁量科目には、外国語の他にも、環境、コンピューター、漢文があり、生徒はの中から1科目を選択する。
- <sup>(2)</sup>日本の文部科学省に当る機関。国の教育政策の策定を行う。
- <sup>(3)</sup>韓国教育人的資源部が2003年後期から2007年まで一般高校で毎年ネイティブ教師を1000名(うち、日本語は700名)ずつ採用するという計画が新聞報道されたことがあったが、予算上の問題等から計画は実現していない。
- <sup>(4)</sup>日本の教育委員会に当る機関。
- <sup>(5)</sup>TTの定義は百瀬(1996)に従い、「複数の教師がチームを組んで協同しながら、それぞれの特性を生かして共通の目標を達成するために実施する授業の形態」と定義する。
- <sup>(6)</sup>正規日本語授業の時間のほかに特技適性(日本のクラブ活動にあたる)の時間がある。この特技適性の時間にネイティブを参加させている学校もあるが、その正確な数は明らかではない。
- <sup>(7)</sup>2005年開校予定の学校を含めて全国に24校あり、そのうち21校に日本語の専攻学科が設置されている。
- <sup>(8)</sup>必ずしも日本語教育を専門としていない。
- <sup>(9)</sup>これまでは、在韓日本人ではなく、直接日本に募集を出し、採用している。
- <sup>(10)</sup>済州道の教育厅が設立した外国語教育を専門とした施設。各言語のネイティブ教師が所属しており、会話指導などを行っている。
- <sup>(11)</sup>文部科学省が実施している「外国教育施設日本語指導教員派遣事業」。全国の公立中学校・高等学校の若手教員を対象として海外の日本語教育を行う中等教育施設に2年間派遣するというもの。帰国後は海外での教育活動を始めとする様々な経験を生かし、学校教育の国際化や地域レベルで国際交流を積極的に推進するヤングリーダーを育成することを目的としている。
- <sup>(12)</sup>春川女子高等学校。
- <sup>(13)</sup>所属校以外の学校へ訪問し、日本語の授業に参加する授業形態。会話授業の補助や文化紹介などを行う。全羅南道教育厅所属のネイティブ教師の訪問授業での活用の例には高壬嘗(2003)がある。
- <sup>(14)</sup>韓国内の小学校・中学校・高校で教師採用試験に合格し、採用となった専任の教師ではなく、教育厅や学校の裁量で一定期間採用となったネイティブ教師。韓国人教師の授業の補助を目的として採用されている。
- <sup>(15)</sup>研修には履修することで地域の教育厅から「学点」と言われる単位が与えられる「職務研修」と、単位がなく、自己啓発のために受けることができる「自律研修」がある。
- <sup>(16)</sup>アンケートは2004年8月と9月に国際交流基金ソウル日本文化センターで行われた職務研修に参加した教師を対象に行った。この職務研修の参加資格は、「教師経験2年以上(実際には1年未満の教師も参加)」、「日本語能力試験2級以上の日本語能力所持者」とされている。
- <sup>(17)</sup>韓国の公立学校の教師採用は、「中学校」と「高校」を分けて募集、採用していない。全体を採用してから中学校と高校に振り分ける。
- <sup>(18)</sup>2003年2月に設立された全国の中等日本語教師の研究会。各地方にある日本語教育研究会の連合会としての役割を果たしている。
- <sup>(20)</sup>特技適正(クラブ活動)における日本語授業でのネイティブ参加の事例についての研究には門脇(2002)がある。
- <sup>(21)</sup>一般高校の『日本語』の年間総学習時間は102時間と定められている。(韓国教育部1997b)この高校では2年生が週3時間日本語を学んでいる。
- <sup>(22)</sup>授業におけるクラスコントロールは全面的に韓国人教師が行った。

〔参考文献〕

- 阿部洋子・横山紀子(1991)「海外日本語教師長期研修の課題 - 外国人日本語教師の利点を生かした教授法を求めて - 」『日本語国際センター紀要』第1号、53-74、国際交流基金日本語国際センター
- 李徳奉(2003)「異文化理解教育の範疇と方向」宮崎里司・ヘレン・マリOTT編『接触場面と日本語教育 - ネウストブニーのインパクト』45-57、明治書院
- (2004)「韓国の新学習指導要領に見る日本語教育の新しい動き」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』11-27、国際交流基金日本語国際センター
- 門脇薫(2002)「海外における非母語話者教師と母語話者教師の協同授業 - 韓国の高校での第2外国語としての日本語授業」『東アジア日本語教育国際シンポジウム論文集』660-679、天津外国語学院
- 韓国教育部(1997a)『中学校裁量活動の選択科目教育課程(別冊16)』教育部  
国際交流基金日本語国際センターのウェブサイト日本語訳が掲載してある。  
<[http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/syllabus/sy\\_tra.html](http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/syllabus/sy_tra.html)>2004年9月1日参照
- (1997b)『外国語科教育課程(別冊14)』教育部  
国際交流基金日本語国際センターのウェブサイト日本語訳が掲載してある。  
<[http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/syllabus/sy\\_tra.html](http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/syllabus/sy_tra.html)>2004年9月1日参照
- (1997c)『外国語系列高等学校専門科教育課程(別冊27)』教育部  
国際交流基金日本語国際センターのウェブサイト日本語訳が掲載してある。  
<[http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/syllabus/sy\\_tra.html](http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/syllabus/sy_tra.html)>2004年9月1日参照
- 倉八順子(1993)「コミュニケーション・アプローチおよび外国人講師とのチーム・ティーチングが学習成果と学習意欲に及ぼす影響」『教育心理学研究』41巻2号、209-220、教育心理学会
- 国際交流基金『2003年海外日本語教育機関調査』  
<[http://www.jpf.go.jp/j/japan\\_j/news/0407/img/research/total.pdf](http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/news/0407/img/research/total.pdf)>2004年9月1日参照
- 澤邊裕子・金姫謙(2004)「高校生のコミュニケーション能力についての一考察 - インタビュータスクにおける生徒の日本語使用から - 」『日本学報』60輯、97-112、韓国日本学会
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター 日本語教育推進企画部 REX 担当(2001)  
『国際教育協力の現状と課題 REX プログラム10年の総括と展望 第三者評価・自己点検評価報告書』東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 巽俊二(2001)『チーム・ティーチングの進め方 授業改善の視点に立って』教育出版
- 細川英雄編(2002)『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
- 百瀬侑子(1996)「海外における若手 Non-native 教師養成のための日本語 Team Teaching」『日本語国際センター紀要』第6号、33-50、国際交流基金日本語国際センター
- 高壬営(2003)「原語民 補助教師를 活用了한 수행평가- 모둠별 말하기 능력 평가를 중심으로-」『韓国日本学会創立30周年記念 第66回国際学術大会 Proceedings』、209-212、韓国日本学会
- 相澤由佳(2004)「한국의 원어민 일본어 교사 수업 실태와 개선방안 연구 -교사의 언어, 사용 교재, 수업 방법을 중심으로-」『日本学報』60輯、113-132、韓国日本学会